

佐藤真史(荒尾教会)

生まれて初めての奄美大島で、田中一村記念美術館を訪問した。絵画に疎い私は、「田中一村(1908~1977)」という名を、その時初めて知った。南画(水墨画)の神童としていち早く活躍した一村だったが、日本画へと画風を変えてからは、苦勞と挫折が続き、その晩年に至るまで評価されることはなかった。亡くなって10年が経ってからようやく再評価され「日本のゴッホ」とも呼ばれている。

全くど素人の私にもはっきりと分かる絵の変化があり、魅入った。一村が51歳で1958年暮れに奄美へ移住してからの作品群だった。

一村にとって奄美は、単なる異郷の地ではなく、自己の芸術を開花させるべき“約束の地”ではなかったか。一村のことばや絵から感じられる清々しい創作意欲は、日本画の因習から解き放たれ、自由な精神を獲得した境地に達していたことを思わせる。^{注1}

「単なる異郷の地」ではない、<いのち>の息吹に触れた瞬間だった。

国立療養所奄美和光園内にある和光伝道所を訪問した。一村は、奄美和光園との出会いの中で、近くにアトリエを構えたと聞く。青山実教師から、今は年数回の礼拝を守るのみと説明を受けながら入ると、部屋に射し込む光、椅子の並び、講壇、その一つ一つが目に焼き付いた。<ここ>にある福音・恵み。確かに礼拝が守られている息吹(プネウマ=霊)。

瀬戸内海にある大島青松園の教会に通っている、シンガーソングライターの沢知恵さんの言葉を思い出す。

私はその礼拝が大好きだったので、行く度に勝手に掃除をしていたんです。建物は使わないと痛みますから。そうしたらね、掃除機をかけていてふっと振り向くと、天国に行ったはずの入所者の方々がいます。えっ!と思って、心臓がドキドキして。私こういう話は苦手で、経験したことなかったんですけど。それで、「ああ、私はここで礼拝をしたいんだ。お掃除じゃなくて、神様を賛美をしたい、祈りたい、み言葉を聴きたいんだ」と、分かった瞬間だったんです。^{注2}

私も和光伝道所で、名瀬教会で、瀬戸内教会で、ここで、「み言葉を聴きたい」。

注1 金城美奈子「田中一村考―「琉球弧」で開花した日本画―」(『沖縄キリスト教学院大学論集』第8号、2011年、31ページ)より抜粋

注2 沢知恵『『沢知恵氏』コーヒーブレイク・インタビュー』(2017年9月26日)

[<http://archives.febcjp.com/category/201710/cbi171007/>]より抜粋